

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月25日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520364

研究課題名（和文） 移動現象と名詞句の構造に関する比較統語論研究

研究課題名（英文） Comparative Syntax of Movement and Noun Phrase Structure

研究代表者

斎藤 衛 (SAITO MAMORU)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：70186964

研究成果の概要（和文）：文は、主語、目的語、動詞等を基本的な構成要素とするが、その左方周縁部には、主題、焦点等の談話的機能を有する要素が表れる。この文周縁部の普遍的な文法構造の解明は、統語論の主要テーマの一つである。本研究では、語順が比較的自由であり、埋めこみの標識（例えば、「と、か、の」等）が豊富であるといった日本語の特徴に注目しつつ、日本語の分析を基礎として、文周縁部構造の解明に寄与する研究を行った。また、名詞句構造については、複数形が欠如し、分類辞（「個、人、本」等）を多用する言語として、日中語の比較研究を行い、名詞句構造の一般的特徴を明らかにする研究を遂行した。

研究成果の概要（英文）：This project aimed to contribute to the research on the left/right periphery based on the analysis of Japanese. The language allows relatively free variation in word order and is rich in complementizers. It therefore offers evidence that is not observed in most other languages. Through this project, we succeeded in collecting new pieces of evidence for the structure of the left/right periphery proposed on the basis of research on Italian and Spanish, and provided support for the universality of the structure. For the noun phrase structure, we conducted a detailed comparative study of Japanese and Chinese as the two languages have rich classifier systems and lack number morphology. It was demonstrated that the main differences between them follow from the head parameter.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：比較統語論、文左方周縁部、補文標識、スクランプリング、引用、名詞句構造、N'削除、パラメーター

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語の文周縁部の研究は、日本語学、言語学の両分野において、主題、焦点、モード、モーダル等の分析としてなされていたが、本研究の直接的な契機となったのは、研究代表者が2007年にイスラエル・ピアシェヴァで開催された国際ワークショップで発表した“Semantic and Discourse Interpretation of the Japanese Left Periphery”である。(改訂を加え、雑誌論文 [6] として2010年に公刊。)この論文は、日本語TPの上位にTheme-Rhemeの構造を形成する機能範疇Predが存在し、スクランプリングとの相互作用により、様々な現象を引き起こすことを示唆するものであった。この機能範疇を、ロマンス系言語やゲルマン系言語の研究に基づいて提案されている左方周縁部構造と関係づけることが、比較統語論を追究する本研究の第一のテーマとなった。

(2) 日本語の名詞句構造については1960年代から研究の蓄積があるが、日本語の現象のみを取り上げる場合には様々な分析が可能であり、必ずしも明確な結論は得られてこなかった。また、他言語との比較研究では、例えば日中語比較において顕著であるように、主に言語間の共通性が注目されてきた。本研究では、日中語のように類似する言語を詳細に比較し、共通点のみならず、相違点も説明することをめざすことによって、名詞句構造を正確に把握できるものと考え、研究を遂行することとした。

2. 研究の目的

人間の生得的言語能力の解明を目的とする生成文法においては、多様な言語の比較を通して、人間言語の普遍的性質を探求することが重要な課題となる。このような比較研究は、これまでも大きな成果を挙げ、その中でヨーロッパ諸語とは典型的に大きく異なる日本語の研究も重要な役割を果たしてきた。同時に、最も分析の進んでいる英語の文法を基礎として言語理論が発展してきた歴史的経緯があり、日本語研究者による比較研究の多くは、日英語比較の形をとってきた。本研究の目的は、日英語比較を一つの軸としつつも、日本語を英語以外の他言語と比較することによって、大きな成果を得ることができると考えられる研究テーマをとりあげ、日本語を中心とした比較統語論研究を展開することにある。より具体的には、スペイン語、イタリア語を中心とするロマンス系言語、中国語、韓国語等のアジアの言語との比較を通して、文周縁部構造、名詞句構造における普遍性とバリエーションの解明に寄与することをめざす。

3. 研究の方法

(1) ① 文周縁部の構造については、まず、日本語補文標識の分布と機能について詳細な記述的研究を行い、Luigi Rizzi氏をはじめとするヨーロッパの研究者によるロマンス系言語、ゲルマン系言語の分析と比較しつつ、日本語の類型的特点を探る。また、この比較研究に基づき、文周縁部構造における普遍性と可能なバリエーションの形態を追究する。随時、Luigi Rizzi氏、Adriana Belletti氏(イタリア語)、Julio Villa-García氏(スペイン語)、Günther Grewendorf氏(ドイツ語)、Andrew Radford氏(英語)を含む研究協力者と意見交換をしながら研究を進める。

② 以上の研究をふまえ、述部(vP)の周縁部構造、モーダル、終助詞に研究対象を拡大していく。ここでも、日本語の記述的研究に基づき、ロマンス系言語、ゲルマン系言語との比較を行う。

(2) 名詞句構造の日中語比較については、以前にT.-H. Jonah Lin氏、村杉恵子氏と共同研究を行い、共通点と相違点が主要部パラメータから導かれる可能性を示唆した。(2001年にカリフォルニア大学アーバイン校で開催された中国語言語学国際学会にて発表。)まず、これを予備研究として、分析を発展させ完成させる。さらに、日韓語の比較にも取り組み、両言語間の共通点と相違点を明確にした上で、後者をマイクロパラメータから導くことをめざす。

4. 研究成果

(1) ① 文周縁部構造については、日本語の補文標識「と、か、の」の意味的特性と階層関係について、スペイン語、イタリア語、ドイツ語の一部方言と比較しつつ研究を進め、Finite(の) < Topic* < Force(か) < Report(と)という主要部の階層構造があることを提案した。この記述的研究に基づき、イタリア語との比較における日本語の特徴は、引用の言い換えを表す「と」の存在と焦点の投射の欠如に集約されるとの結論を得た。さらに、上記階層構造をそれぞれの補文標識の意味的機能の帰結として捉えることも示唆した。この成果は、2009年にフランクフルト大学で開催された文タイプに関する国際学会において発表しており(学会発表 [7])、論文としてはMouton de Gruyter社から出版される同学会の論文集に掲載される予定である。

② スペイン語の補文標識 *que* が引用の言い換えを表す機能を有することは、Susan Plann氏によって指摘されていたが、「と」はこの機能に特化した補文標識であることを詳細な記述的研究により示した。また、この補文標識の存在により、日本語の多くの談話的特徴が説明されることを指摘して、文法分析に

基づく談話研究の必要性を明らかにした。この研究は、雑誌論文 [3] にまとめ、学会発表 [2] や数件の大学講演においても公表している。

③ 述部 (vP) 周縁部の性質について、瀧田健介氏と共同研究を行い、その成果を雑誌論文 [8] として公表した。この論文は、vP 周縁部への移動がフランス語では A あるいは A' 移動の性質を有するのに対して、日本語では常にスクランプリングの性質をもつことを明らかにし、この相違の根底にあるパラメータを検討したものである。また、関連するテーマとして、日本語における EPP 素性の分布と役割についても、研究を行った。PredP における Theme-Rheme 構造の形成、vP 内の目的語前置等、日本語特有の現象が EPP 継承の欠如により統一的に説明されるとの結論を得て、成果を雑誌論文 [2] に公表した。

④ 以上の成果をふまえて、日本語のモーダル(推量、命令、勧誘等)と終助詞(「わ、よ、ね、な」等)の分析を開始した。上田由起子氏、遠藤善雄氏によるカートグラフィー分析を検討し、さらに、カートグラフィー構造そのものを意味的、形態的な選択制限から導く研究を、原口智子氏との共同研究として進めている。モーダルについては、認識モーダルと発話伝達モーダルの階層性が提案されているが、モーダルはすべて命題を選択し、それぞれのモーダルが時制あるいは動詞の語幹を形態的に選択すると仮定することにより、モーダルの分布がよりの確に説明できることを示した。また、終助詞については、遠藤氏が階層性を指摘して、Guglielmo Cinque 氏の副詞階層に基づく分析を試みているが、終助詞の階層性そのものが、それぞれの終助詞の発話行為上の役割によって説明されることを明らかにした。初期の成果は、2012年6月にジュネーブ大学で開催される左方周縁部に関する国際ワークショップで発表する予定である。

(2) ① 名詞句構造の日中語比較について、T.-H. Jonah Lin 氏、村杉恵子氏と共同研究を行った。修飾のマーカとされる「の」と *de* の分布、分類辞の分布と解釈、N' 削除の適用環境を中心として詳細に両言語を比較し、共通点と相違点が、中国語が主要部前置型言語であるのに対して、日本語が主要部後置型言語であるという基本的な差異から導かれることを示した。まず、「の」と *de* の分布の相違に関して、前者が挿入格であるのに対して後者が主要部 D であるとの分析を提示し、両言語間にみられる N' 削除現象の相違もこの分析の帰結として導かれることを論証した。また、分類辞句の分布の相違についても、中国語の分類辞が主要部前置型名詞句構造内の主要部であるのに対して、日本語の分類辞

句は修飾の要素であることを示し、この差異が主要部パラメータから導かれることを提案した。この成果は、雑誌論文 [9] において公表済みである。その後も、「の」と *de* の分布について、特に数量詞、分類辞との統語的關係に注目しつつ共同研究を続けており、2012 年度中に上記論文の続編を発表する予定にしている。

② 日韓語比較については、Duk-Ho An 氏と共同研究を行い、その結果を雑誌論文④として公表した。先行研究において両言語間の様々な差異が示唆されていることを受けて、この論文ではまず、削除現象全般について両言語を詳細に比較し、項削除やスルーシングでは差異がないことを確認した。その上で、韓国語における N' 削除の欠如が唯一の相違としてあることを明らかにして、その根拠を追究した。特異な名詞省略の例に基づいて、「の」と対応する韓国語の *uy* の間に微細な分布の相違があることを指摘し、この相違を説明するマイクロパラメータを提示して、N' 削除が日本語のみで観察されることがこのパラメータにより説明されることを論じた。

(3) ① 文周縁部構造、名詞句構造と密接に関連するテーマとして、文法格の認可をめぐる問題がある。特に、最近では日本語研究においても、「一致」による文法格の分析が主流となっているが、これは、上記の名詞句構造の分析とは相容れないものである。そこで、研究期間中、日本語文法格の分析を平行して追究した。雑誌論文 [5] では、主格の分布と意味解釈に対する影響を詳細に検討し、日本語においては、文法格の認可は一致に依存しないことを論証した。特に、多田浩章氏、小泉政利氏の考察を検証して、主格名詞句が広作用域をとるとする両氏の一般化を支持する議論を展開するとともに、統語的には主格目的語が目的語の位置に留まることを示した。前者は、一致による分析と矛盾するものであり、代案として非頭在的移動による主格認可を提案した。

② 雑誌論文 [1] では、雑誌論文 [5] で行った観察により根源的な説明を与えることをめざして、併合に基づく文法格の分析を提示した。この分析は、研究代表者が、1982 年の論文 “Case Marking in Japanese: A Preliminary Study” において提案した分析を、極小主義理論の枠組みにおいて発展させたものである。主格目的語の分布と作用域のみならず、属格主語の分布などが分析の帰結として導かれることを論じた。言語にみられる様々な語順を説明するものとして、Richard Kayne 氏の線状化理論が広く仮定されているが、この理論が日本語にどのように適用されるかについては問題として残されていた。本論文では、併合に基づく日本語文法格の分析のさらな

る帰結として、日本語の主要部後置型句構造を Kayne 氏の理論によって説明することが可能になることを指摘し、句構造理論研究の新たな方向性も示唆した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

- [1] Saito, Mamoru. “Case Checking/Valuation in Japanese: Move, Agree, or Merge?” (査読なし), *Nanzan Linguistics* 8: 109-127, 2012.
- [2] Saito, Mamoru. “Two Notes on Feature Inheritance” (査読なし), *Nanzan Linguistics* 7: 43-61, 2011.
- [3] Saito, Mamoru. “On the Nature of the Complementizer *To*” (招待により査読適用外), *Journal of Japanese Linguistics* 26: 85-100, 2010.
- [4] Saito, Mamoru and Duk-Ho An. “A Comparative Syntax of Ellipsis in Japanese and Korean” (招待により査読適用外), *MIT Working Papers in Linguistics* 61 (Proceedings on the 6th Workshop on Altaic Formal Linguistics): 287-307, 2010.
- [5] Saito, Mamoru. “On the Scope Properties of Nominative Phrases in Japanese” (招待により査読適用外), *Universals and Variation*, ed. by Rajat Mohanty and Mythili Menon, EFL University Press, Hyderabad, 313-328, 2010.
- [6] Saito, Mamoru. “Semantic and Discourse Interpretation of the Japanese Left Periphery” (査読あり), *The Sound Patterns of Syntax*, ed. by Nomi Erteschik-Shir and Lisa Rochman, Oxford University Press, Oxford, 140-173, 2010.
- [7] Saito, Mamoru. “Optional A-Scrambling” (招待により査読適用外), *Japanese/Korean Linguistics* 16: 44-63, 2009.
- [8] Saito, Mamoru and Kensuke Takita. “On the Variety of Movements to the vP Edge” (査読なし), 由本陽子, 岸本秀樹編, 『語彙の意味と文法』, くろしお出版, 東京, 307-327, 2009.
- [9] Saito, Mamoru, T.-H. Jonah Lin and Keiko Murasugi. “N'-Ellipsis and the Structure of Noun Phrases in Chinese and Japanese” (査読あり), *Journal of East Asian Linguistics* 17: 247-271, 2008.

[学会発表] (計 9 件)

- [1] Saito, Mamoru. “The Japanese Right Periphery: Preliminary Results and New Issues” (招待研究発表), National Tsing Hua University Consortium Workshop 2012, 2012 年 3 月 5 日, 国立清華大学 (台湾).
- [2] 齋藤 衛. 「日本語埋めこみ文の類型と構造—比較統語論の見地から」(講演), 日本第二言語習得学会 2011 秋の研修会, 2011 年 10 月 23

日, 名城大学名駅サテライトキャンパス.

- [3] Saito, Mamoru. “Case Checking/Valuation in Japanese: Move, Agree, or Merge?” (招待研究発表), *GLOW in Asia* (アジア理論言語学会) Workshop for Yung Scholars, 2011 年 9 月 7 日, 三重大学.
- [4] 齋藤 衛. 「日本語埋めこみ文の意味的・談話的性質—比較統語論への招待」(招待講演), 津田塾大学「英語の共時的・通時的研究の会」25 周年記念大会, 2011 年 8 月 28 日, 津田塾大学.
- [5] Saito, Mamoru. “On the Architecture of Japanese CPs” (招待研究発表), *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 5, 2010 年 5 月 8 日, カリフォルニア大学サンタクルーズ校.
- [6] Saito, Mamoru and Duk-Ho An. “A Comparative Syntax of Ellipsis in Japanese and Korean” (招待研究発表), *The 6th Workshop on Altaic Formal Linguistics*, 2009 年 9 月 6 日, 名古屋大学.
- [7] Saito, Mamoru. “Selection and Clause Types in Japanese” (招待研究発表), *International Conference on Sentence Types: Ten Years After*, 2009 年 6 月 27 日, フランクフルト大学.
- [8] Saito, Mamoru. “On the Scope Properties of Japanese Nominative Phrases” (招待研究発表), *GLOW in Asia* (アジア理論言語学会) 7, 2009 年 2 月 27 日, ハイデラバード EFL 大学.
- [9] Saito, Mamoru. “Semantic and Discourse Effects of Scrambling” (基調講演), *The 7th Pan-Asiatic International Symposium on Languages and Linguistics*, 2008 年 12 月 5 日, 広東外語外貿大学.

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

<http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/LINGUISTICS/staff/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 衛 (SAITO MAMORU)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：70186964

(2) 研究分担者

()
研究者番号：

(3) 連携研究者

()
研究者番号：